

トンケの蒼い空

2005(平成17)年10月19日鑑賞(東宝東和試写室)



監督・脚本＝クァク・キョンテク／出演＝チョン・ウソン／キム・ガプス／オム・ジウォン／キム・テウク／ヤン・ジュンギョン／イ・サンフン（東芝エンタテインメント配給／2003年韓国映画／101分）

……韓国語で野良犬を意味する「トンケ」を演じるのは、韓国正統派男優を代表するチョン・ウソンで、大きくイメチェンをさせたその演技にはビックリ……。いかにも韓国風のドタバタ抗争の中で浮かびあがる警察官の父親と息子との、無骨だが心通う愛情に注目！ ラストに流れるアップテンポな主題歌を聴きながら、「トンケ」の二重、三重の意味を十分復習しよう……。



トンケとは？

トンケとは韓国語で「野良犬」という意味だが、パンフレットによれば一方で親戚の子供を呼ぶ時にも使う、親しみと愛情のこもった呼称とのこと。そしてこれがこの映画の絶対的なキーワード……。この映画では、まず第1に幼い時に母親を亡くし、父親の手1つで育てられ、トンケのような生活をしている主人公チョルミン（チョン・ウソン）を呼ぶ名前として使われる。第2は、チョルミンがいつも行動を共にしている文字どおり1匹の大きな雑種犬に対するもの。

以上2つはすぐにわかるトンケだが、第3のトンケは成長したチョルミンとその父親バンジャン（キム・ガプス）との間の男同士の結びつきの中におけるトンケ像。この第3のトンケがある意味で、この映画最大のポイントかも……？



トンケを演ずるのは？

トンケことチョルミンを演ずるのは『武士（MUSA）』（01年）で圧倒的な存在感を示し、10月22日に公開される『私の頭の中の消しゴム』（04年）で観客を大

いに泣かせる純愛ドラマに挑戦している正統派俳優のチョン・ウソン。パンフレットによれば、韓国で最もハンサムな男が「トンケ」役を演じたのは、「10本目の節目となる作品では、固定されたイメージから抜け出し、演技の幅を広げたい」と考えたためとのこと。たしかに背が高くカッコいいくせに、ちょっとアホウヅラをし、動作もトロ臭い「トンケ」役にうまく入り込んでいる。たとえば『オアシス』（02年）でムン・ソリが重度身障者の役を演じたように、このような役柄の幅を求めるのもまた韓国流……？ 日本では、ハンサム俳優がこんなバカウヅラ役をやるとイメージが壊れるデメリットの方が大きいとされるはずだ……。

韓国人は犬を食う国民……

幼い頃父親からもらった雑種犬のトンケといつも一緒だったチョルミンは、今は高校2年生となりサッカー部に入っているものの、補欠でありあまりさえない存在。韓国の高校ではさまざまな派閥があり、その抗争があることは『マイ・ボスマイ・ヒーロー』（01年）、『品行ゼロ』（02年）、『マルチュク青春通り』（04年）などで明らか……？ 私が観ている限りでは、別にチョルミンの態度がデカイとは思えないが、1年先輩のジンムク（キム・テウク）たちには、どうもいつも犬のトンケと一緒にいるトンケのようなチョルミンが気に入らない様子。そんな中、ジンムクたち先輩陣は、ジンムクの誕生日パーティーの日に一計を案じて、人間のトンケと犬のトンケを隔離させたうえ、おいしい犬の肉をたらふくと……。これにチョルミンが激怒したのは当然。チョルミンはジンムクの側近たちをぶちめしたが、それが互いに後日の遺恨を生むことに……。

それにしても「食い物の恨みは恐ろしい」と言うものの、犬の肉がこれほどまでの抗争の原因になるとは……。これも韓国流……？

ジョンエの登場はちょっと不自然

ある日チョルミンが家に帰ると、そこには若い女ジョンエ（オム・ジウオン）が……。？ 父親の説明によると、この女は常習の窃盗犯で、行く当てがないから家に引きとったとのこと。そして、「決して家政婦ではない。明日から妹だと思って仲良く暮らせ」ときた。しかし、いくら父親でも、またミリャン市という小

さい市(?)の警察官でも、そりゃちょっと無茶というもの。さらに、「ジョンエには母さんの部屋を使わせる」と言っても、今までの男2人の世帯に急に若い女が入ってくれば……? もっともこの映画では、男女間のストーリーはあくまで「傍論」としての取り扱い……。

ジェット団とシャーク団の抗争は?

『ウエスト・サイド物語』(61年)は、ジェット団とシャーク団に分かれた若者たちの抗争劇だったが、この映画で、高校を中退したチョルミンが所属するグループはMJK。今年の阪神タイガース優勝の大きな原動力となったのは、JFK(ジェフ・ウィリアムス、藤川球児、久保田智之)の球援陣にあったことは明らかだが、このMJKとはミリヤン・ジュニア・クラブの略。要するに、トンケと同じように高校を中退してしまった、ある意味で落伍者のグループ……? 他方、無事(?)高校を卒業したジンムクたちは、高速道路開発絡みの悪事を企む町の権力者オ・ドンマン(ヤン・ジュンギョン)たちの手先となって、町の中を風を切って歩くグループとなっていた。この2つのグループの衝突は、1度、2度と危機一髪のところで阻止されていたが、遂にある時……?

こんな決着のつけ方は便利だが……?

2つのグループの抗争劇に割って入ったのがパトカーだったから、留置所内は若者たちの熱気(?)であふれかえることに。いくらイキがっていても、警察権力の前ではチンピラたちは無力で、パンツ1枚にさせられてケツの穴に隠したものがなかどうかをチェックされる始末……。しかし、ここでも鉄格子の中に閉じ込められた若者たちの対抗心は、ヤジの応酬となってさらにエスカレート……。

ここで面白いのは、チョルミンがジンムクに対して2人だけで決着をつけようではないかと提案したところ、刑事もこれを承認したこと。そこで、刑事自らが「この2人の決着で負けたほうが罪をかぶり、以後お互い一切異議を述べません」という誓約書を書いて2人に血判を押させたうえで、この2人を闘わせることに。こんな決着のつけ方は便利だが、いくら警察権力が強い韓国(?)でも、こりゃありえないのでは……? しかしストーリー展開としては結構面白いもので、こ

の2人の死力を尽くした肉弾相うつ攻防戦は1つのハイライト……。

大人の抗争は……？

若者同士の抗争はバットを持つての単純なケンカだったが、高速道路建設をめぐる利権や賭博開帳などの複雑な犯罪になると、それは大人の世界……？ ここで、目立つのが、捜査係長から刑事課長に昇進したチョルミンの父親バンジャンが、かなりの切れ者で優秀な刑事であり、さらに指揮官だったこと。MJKに属するチョルミンの友人テットク（イ・サンフン）の父親をワナにはめたのが、オ・ドンマンの仕業だと考えたチョルミンのような単純そのものの行動ではなく、刑事課長のバンジャンはさすがに冷静沈着かつ適切大胆に捜査を続け、遂に起工式のお祝いの席において、オ・ドンマンを逮捕！ 日本の捜査陣にもこんな風に、公共事業に絡んだ諸悪の根源を暴いてもらいたいものだが……。

父と息子の網ガラス越しの対話は……

この映画は、犬のトンケの逸話（？）や若者のグループ同士の抗争を描いているが、ホントに描きたいテーマは、幼い頃に母親を失ったためトンケ状態となった（？）チョルミンと、母親がチョルミンを生む時にチョルミンをとるか母親をとるかの選択を迫られた父親との温かい心の交流……？ もちろん男同士だから、普段の生活での会話はつっけんどんだし、ケンカすると結構ハデだが、若者同士の抗争で警察の留置所内に入った息子に面会する父親のシーンは、静かだがこの映画のもう1つのハイライト。父親と息子との心の交流が網ガラス越しというのもヘンな感じだが、そういう「非日常」の中にこそ真実があるのかも……？

この映画のエンドロールではアップテンポな主題歌が流れてくるので、字幕でのその歌詞に要注目！ この曲も、最後のキーワードはもちろん「トンケ」だが、そこに至るまでの歌詞は、幼い頃に母親と死に別れ、父親の手1つで育てられた息子のさまざまな想いがギューギューに詰め込まれている。ヨン様ではとてもやれないであろう（？）こんなトンケ役にチョン・ウソンが挑戦したことに拍手を送るとともに、再度「トンケ」という韓国語の意味を十分に復習してみよう……。

2005(平成17)年10月19日記